井川惺亮 －色の広がり－
公開制作の報告

石　﨑　三佳子

1．はじめに

愛媛県美術館では、平成11年度より作家の制作姿勢に触れる機会として公開制作を年に1回、実施している。15年度までの公開制作では、当館の創作活動スペースである「県民アトリエ[(1)]」の広報、利用者の増加を図ることも主眼に置きながら、分野や講師の選定を行ってきた。特に、アトリエに設置してある版画機材での版画制作は、技法の複雑さから利用者が少ないことと、版画の多様な技法の制作過程を紹介することは作品鑑賞の手引きとなると考え、版画分野で実施した。この5年間で、各版種一通り取り上げることができ、毎回、アトリエからあふれるほどの参加者があり、複雑で多様な版画の理解や関心を深めることができた。しかし、鑑賞の一助とするための参加であったり、「見る」ことだけでは制作への動機付けには不十分であったりと、公開制作によるアトリエでの版画利用者の増加には、期待するほどの成果はみられなかった。そこで、16年度公開制作を企画するにあたり、方向性として今後も版画のみを繰り返し実施していくかを含め公開制作という事業のあり方について、普及係内で討議することとなった。

まず、版画だけに限定する意味の希薄さ、分野が偏ることへの疑問が挙げられた。ほか、アトリエにおける版画利用者の増加を促すためであれば、技術を修得できる講座のような実践的な方策を検討すべきではないか。もっと参加者が積極的に関われるワークショップ形式のアプローチの仕方も模索できるのではないか。といった意見により、これまでの方法に捉われず、これまでとは違った方法が探れる公開制作の実施を試みることにした。

本稿では、見直しを図った今回の公開制作について、実施記録をまとめ、公開制作の方法や意義を考えることとする。

2．講師の選定

今までと違った切り口のできる作家を期待し、作家の選定が行われた。

そこで候補として挙げられたのが、愛媛県出身でもある井川惺亮氏であった。

井川氏はフランス留学時（1975－79）、クロード・ヴィアラに師事し、当時より絵画と題し、赤・青・黄の三原色を基調とした９つの既成の色で着彩するスタイルを確立する。帰国後の作品は、絵画を支える画布や木枠の属性を解体し再構築され、壁から次第に離れて空間に漂い、その空間に浮遊する色彩は、ついには日常の事物へと転移する。そして、作品を配置する場所性、作品と鑑賞者の関係性、といった作品を取り巻く外部世界を絵画の構成要素として位置付け、絵画の可能性の拡張を探り続けている。

また、井川氏は国内外で数多くの個展、グループ展を開き、作品を発表する一方、長崎大学での美術の指導のほか、ワークショップの開催、美術を通じてのまちづくりや地域活性化、国際交流など美術の普及に積極的に取り組んでいる。

選定の理由として、井川氏の作品及び経歴より、

- 愛媛県出身の作家である。
- 特徴的な明るい色彩、日常的な空間を利用しての展示手法を用いた作品は、親しみやすさを与える。
- 作品を組成する紙、絵の具は馴染みのある一般的な素材によるもので、当館でも制作可能であり、制作過程も鑑賞者が理解しやすいと考えられる。
- 地域性、場所性を意識した制作は、愛媛県美術

館オリジナルの公開制作が期待できる。

・絵画（美術）の概念を再考する機会となり得る。

・過去に公開制作、ワークショップ等の経験がある。

以上のことから、講師として井川氏は、単なる制作現場の公開に留めず、作家の制作姿勢に取り組む姿勢や作品について、実体験を通し、より理解が深められる公開制作が期待でき、公開制作の転換を試みる作家として適任であると考え、井川氏に講師を依頼した。

３．趣旨

井川氏の作品の魅力、またそれを通じ、美術の魅力、楽しみを発見してもらうために、今回の公開制作では、内容を構成する上で、次の3つのことを目的に設定した。

①制作過程の公開

②作品鑑賞

③作家の制作手法の追体験

「作品設置も製作行為の延長となり、そのことは作品作りそのものであり、いわゆる絵筆をまだ動かしている状態なのである[(2)]」と作家自身が述べているように、展示行為、空間作りはまさに井川氏の作品にとって制作過程の一部であり、かつ場所性を重んじる井川氏には作品を完成させる上で重要な作業である。したがって、①では時間の制約もあり、展示行為の部分を公開することを望んだ。

②では、見る人にさまざまな違う見方をもたらす現代美術の魅力を井川氏の作品を通し実感する機会を考えた。

③については、井川氏の制作手法を追体験することで生きた体験により、井川氏の制作意図の理解を深める手段として効果を期待した。

美術館側よりこの３つの目的に沿った公開制作を井川氏に希望したところ、意向に合わせ具体的なコンセプト（**資料２**）が井川氏より提出された。

４．内容

（１）作品展示

○場所：エントランスホール、２階－研修室前、２階－展望ロビー（いずれも新館）

○展示期間：平成17年１月８日（土）～30日（日）（休館日：11・17・24日）20日間

※１月５日（水）～７日（金）は展示作業を公開

○入場料：無料

○入場者数：1,011人

○概要：

この作品展示は、前章で挙げた①②を目的とした内容である。展示作品は、既に展覧会で発表したことのある作品、紙などに９つの原色でシステマティックに着彩したものを当館の環境に合わせ再構成した。

松山城の三之丸内に建てられた当館新館は、美術品をまもることはもちろん、建物の置かれる背景として、道路遺構と、敷地内外のクスノキの大樹、城山周辺の景観をまもることを考え設計された。[(3)]展示室以外の人の移動する空間の外との境界はほぼガラスが用いられていて、外の景色がガラス越しに広がり、外からも内部の様子が見通せる造りとなっている。特にエントランスホール部分はガラスに囲まれ、周囲の景色がつながるように見渡すことができ、周辺環境に溶け込んだ開放的な空間である。

場所性の意識したインスタレーションを行う井川氏に、そういった設計意図と合わせ、美術館の特異な空間を生かしながら、周辺の環境との調和を図った空間づくりを望んだ。

また、井川氏は展示スペースを選ぶにあたって、普段使われない空間、意識しない空間を活用すること、人の動きを妨げないことを心がけた。

まず、正面玄関横のガラス壁面には３点の作品の間から松山城の姿が覗くよう作品を配し、作品と松山城の関係性を問うものとなった。（**資料９　展示図面及び写真３－①**）

今回の展示のメインとも言える、１階エントランスホールの中庭に面したガラス部分は、中庭の樹齢130年以上を超える三本のクスノキや、その間からのぞく空を借景とした横約20mに及ぶガラスのキャンバスに様々な形の作品を配置し、１枚の絵画を思わせる空間を作り上げた。（**資料９　展示図面及び写真３－②③④**）

その上部の１階から２階の吹き抜け２m幅程の空間には、２階フロアーから中庭に向けての構造物である細い桟を利用して、２階フロアー、１階天井に平行する位置に作品を宙に浮かすような感じで展示した。これは、床面に続く作品は色の落ち葉が敷き詰められた枯山水のイメージによるものであった。ガラス面に作品は映り込み色の床面は中庭のクスノキの間にも広がり空中庭園のような雰囲気となった。**（資料９　展示図面及び写真３－⑤）**

１階トイレの入り口のあるセラミック壁の上部、２階フロアーより下がった所の人が座れる程のスペースに、クスノキの枝に着彩した作品を中庭のクスノキの延長線上に展示した。**（資料９　展示図面及び写真３－⑥）**

エントランスホール中央のエレベーターの構造物、正面玄関側の黒い壁面には、『今昔物語集[4]』に収められている説話に登場する９つの色をもつ鹿のイメージで流木に着彩した作品３点を高さ約10mの位置に吊るした。長さのある木の枝を吊るす糸も見せながら、エントランスホールの高さが強調された展示となった。**（資料９　展示図面及び写真3－⑦）**

２階の研修室前は、ブラインド部分に重ねるように階段上の作品を展示した。ブラインドの効果により、縞状に明暗が生まれ、建物の構造物と一体化した作品となった。**（資料９　展示図面及び写真3－⑧）**

展望ロビーでは、まず、直線距離にすると約50mのＬ字のガラス壁面を利用した。そこからは松山城が座す城山が眼前に広がる場所であり、椅子に座って休めるスペースとなっている。休憩スペースで外の景観の見え方も損なわない井川氏の配慮から、椅子に座ったときに視界をさえぎらない展示を意識した。そこでの作品は城山の稜線に添わせたりしながら、様々な形の切り紙の構成による作品のようにまとめられた。**（資料９　展示図面及び写真３－⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮）**

展望ロビーのガラス壁面に対する白いセラミックの壁面には、ボリュームのある紙の作品を展示した。これは、外から見るとガラス壁面の作品の奥にも作品を配置することで、奥行きが生まれるという、外からの見え方をも意識しての作品となった。**（資料９　展示図面及び写真3－⑯）**

展示内容は、作業時間と作品を固定するための高所作業の限界により、規模の縮小、作品の位置の変更を余儀無くされたが、井川氏のコンセプトにある「外側の風景と内側の建築空間との調和」を図り、「普段意識されない内側空間と外側空間とを再認識する」展示となった。

（２）ワークショップ「色の広がりと空間を楽しもう！」

このワークショップは前章の②③を目的とした内容である。詳細な内容や実施方法は井川氏の指導のもと、長崎大学教育学部[5]の学生が中心となりプラン**（資料２～７）**を作成し、準備や実施についても協力いただいた。

まず、打ち合わせで作家より、制作だけに留めず、展示・鑑賞する機会も重視したい、という強い意向があった。展示は作家の制作の根幹となる行為であるため、エントランスホールの作家の展示作品と合わせ、展示・鑑賞をワークショップに含むことは、作家の制作意図を汲み取る上で意味深いものとなると考えられた。

また、地域性を生かし、公開制作後も当館で特色あるワークショップの展開が望めるものがよいのではないか、という提案もあり、その地域性を素材に求め、愛媛県産の和紙である周桑和紙[6]を使用することにした。

参加対象者としては、井川氏の過去の経験や作品から、どのような対象であっても対象に応じたワークショップが想定できるであろうと考えられたので、幅広い層に参加できるよう間口を広げたプログラムとなることを望んだ。その美術館側の希望に応じていただき、作家の制作手法を追体験するワークショップは、対象を小学生、中学生以上に分けてプログラムを実施することになった。加えて、今までの公開制作に近いものとして、制作を伴わない鑑賞形式のプログラムも用意した。

①中学生以上対象プログラム

○日時：1月８日（土）　10：00～15：30

1月10日（月）　10：00～12：00

○場所：【１日目】講堂、アトリエ２、実技教室
【２日目】エントランスホール、
展望ロビー

○定員：50名

○スタッフ：
井川惺亮（講師）、石崎三佳子、田代亜矢子、
長崎大学教育学部　井川研究室学生

○材料費：150円

○主な材料・道具：
和紙（45cm×45cm）、アクリル絵の具、セロテープ、絵筆、ビニールコップ、ドライヤー

○概要：

【１日目】午前中、講義形式でスライド等の映像と解説により井川氏のこれまでの作品や活動について知る。午後からは、井川氏の作品にもある折り紙の行為を取り入れた制作を行う。用意された和紙を自由に折る。その際、井川氏は願いを託し折ることを促す。折りたたまれた状態の表面に用意された６色のアクリル絵の具で着彩していく。それを広げると折り込んでいた余白が現れ、同時に着彩した色の部分が拡散し、思いもよらない平面作品が出来上がる。作品は２点制作し、そのうち１点を部屋の壁に貼り付け、鑑賞会を行い、参加者に自作について語ってもらう。そこで発表した作品は、各自自宅に持ち帰る。**（資料３，４）**

【２日目】小学生と共同の活動となる。１日目に制作した作品のもう１点を、すでに展示している井川氏の作品とともに空間を共有し、グループ毎に決められた場所に展示を行う。その後、井川氏の作品、ワークショップ参加者の作品の鑑賞会を行う。**（資料７）**

②小学生対象プログラム

○日時：A　１月９日(日)　10：00～12：00
　　１月10日(月)　10：00～12：00
　　B　１月９日(日)　13：30～15：30
　　１月10日(月)　10：00～12：00

○場所：【１日目】アトリエ２
【２日目】エントランスホール、
展望ロビー

○定員：A、B　各20名

○スタッフ：
井川惺亮（講師）、石崎三佳子、田代亜矢子、
長崎大学教育学部　井川研究室学生

○材料費：150円

○主な材料・道具：
和紙（45cm×45cm）、アクリル絵の具、セロテープ、絵筆、ビニールコップ、ドライヤー

○概要：

【１日目】中学生以上を対象にしたプログラムの講義部分を除いた同様の工程で、井川氏の作品にある折り紙の行為を取り入れた制作と作品鑑賞を行う。最後に、数名の完成した作品を額に入れて、額装し展示することで印象が変わることを確認する。**（資料５，６）**

【２日目】中学生以上と共同の活動となる。１日目に制作した作品の１点を、すでに展示している井川氏の作品にとともに空間を共有し、展示を行う。その後、井川氏の作品、ワークショップ参加者の作品の鑑賞会を行う。**（資料７）**

③一般対象プログラム

○日時：１月10日(月) 13：30～14：30

○場所：エントランスホール、展望ロビー

○スタッフ：
井川惺亮（講師）、石崎三佳子、田代亜矢子、
長崎大学教育学部　井川研究室学生

○概要：
一般鑑賞者を対象に井川氏の展示作品について、解説を行う。**（資料８）**

５．結果

(1) 作品展示

○入場者：1，011名

日常空間に作品を融合させながら作品化していった井川氏の空間は、見慣れた風景が特別な空間へと変化した。井川氏のしかけは作品が風景の中へ引き寄せられたり、反対に作品の中へ風景が引き寄せら

れたりと、内と外とを結ぶ作用が働き、鑑賞者の視覚を楽しませてくれた。内部の変化はもちろんだが、建物の外に立ったとき、建物からのぞく作品の色彩は建物を含む周辺の景色の印象にも影響を与えた。鑑賞者の立つ場所や時間によって、目に映る風景は様々で、生きた作品空間と言えるものであった。

展示場所として設定したエントランスホール等の外界と連続する場所は、外光や空調の風、ガラスへの映り込み、作品の重なりといった様々な事象が作品に効果的に働き、井川氏の制作意図を伝える上で有効な作用をもたらしたと思われる。また、開放的な空間、人の出入りの多い場所、外からも作品の存在を認められる場所として、公開制作の事業自身をアピールする上でも相応しい場所であった。展示室ではない場所での展示であり、作品として認識されていない様子もうかがえたが、あえて展示室で行わなかったことで、美術の多様性を示す機会となり、展示室という特別の空間からか日常空間に近い場所での展示は、親しみやすさ、馴染みやすさを与えることができたと思われる。

作家の作品に合わせてワークショップ参加者の作品を展示する試みでは、そのことを前提にした展示計画がなされていたので、参加者と作家との作品を同じ空間に並べても全く違和感のない統一感のとれた展示となった。ワークショップ参加者にとって、自分の作品を作家と同様に展示するという行為は、他者に見てもらうことを意識し、展示することの喜びを実感できるものとなった。井川氏の作品や自らの展示体験を通し、作品を生かす方法、展示の意義を実感できたのではないだろうか。

作品展示に関連して行われた井川氏による設営作業の公開については、公開制作としては主要な場面であったにもかかわらず、広報で補足的に扱ってしまったため、見学者はまばらとなってしまった。作家が作品と向き合う場面、少しずつ空間が変容する過程を目撃できる折角の機会をうまく広報できなかったことは反省すべき点である。

(2) ワークショップ

○参加者

①中学生以上対象プログラム　45名

②小学生対象プログラム　A：21名　B：21名

※①②のプルグラム２日目の参加者は合計45名

③一般対象プログラム　21名

中学生以上の部で行った制作前のスライドレクチャーでは、これまでの作家の活動の紹介を通し、作家の制作姿勢に触れ、「美術は楽しむもの」「感じたことを素直に表現すればいい」「自由で決まりがないこと」といった参加者の感想（**資料10**）から、作家の取り組む美術（現代美術）への理解を深めることができたことがうかがえた。その後、作家の手法を追体験すること（＝実技）で、より具体的に制作意図を実感できたように思われる。

井川氏の既成の色を使用したシステマティックな着彩の手法は、誰にでも共有できる特性がある。今回のワークショップ中の制作に関しても容易な手法によるものとなり、子どもから大人まで同じ内容で実施することができた。それは、完成作品の巧拙や優劣を偏重するものでなく、参加者が体験する活動の過程を重視するものとすることができた。紙を折る、色を付ける、という何気ない行為が、新鮮な行為として捉えられ、子どもから大人まで素直に楽しめる造形活動となった。

素材として用いた和紙は、和紙の説明や感触を確かめることで、小学生の感想文には素材として「紙」ではなく「和紙」としてしっかり区別されていた。地元の素材を用いたことで、素材は親しみやすいものとなり、素材への興味付け、地域の良質の素材を見直すことができたのではないだろうか。

作家が最も重視した展示、鑑賞については、自分が制作した作品を展示することで、参加者は展示のおもしろさや難しさを知り、その後みんなで仕上げた展示を鑑賞することで、展示の意義、効果を自らの体験を通し実感することができた。また、互いの作品をじっくり見ることで、個人の存在を認め合い、個性を確認する機会ともなった。鑑賞の時間は、井川氏は自作について語りながら、積極的に参加者に働きかけ、参加者にも自分の作品についての言葉を引き出し、美術がコミュニケーションのツールとし

ての役割を果たす場面が見られた。展示（額装）からその鑑賞における一連の体験を取り入れたことは、作家の制作活動の根幹に深く結びついた体験となり、井川氏の作品を理解する上でも必要な過程であったと思う。

技術を問わない偶発的な手法に加え、展示、鑑賞といった活動は、制作を主体とし、出来上がった作品の能力的な面を重要視する学校の美術・図工の授業や絵画教室とは異なった美術体験の機会となり得た。この体験で得たことを今後の制作活動や生活の中に生かそうとする発展的な動きが参加者の内面にうかがえたことは大きな成果であったと言えよう。

６．結び

今回、前年度までとは、全く違った形での公開制作となり、あらゆる角度から作家を捉えることを試みることができた。ワークショップにて、観客を参加者へと巻き込み、自らが積極的に作家や作品に関わることで作家の思考や作品は身近なものとなり、リアルなものとして受け入れられた。参加者層もこれまでのものとは異なり、小学生はもちろん、中学生や大学生、社会人の参加を募ることができ、参加年齢層の幅を広げることができた。作品展示では、エントランスホールなどの日常空間を生かした展示により現代美術の魅力を十分に紹介でき、展示スペースとしての活用の仕方、そして、美術館の建物の特性を再認識することができた。

特に、作家の思考や作品の理解だけでなく、鑑賞者の美術に対する価値観を変え、参加者、鑑賞者に美術の楽しさ、美術の違った捉え方、ものの見方を発見する機会となり得たのは、現代美術という力によるところが大きいと思われる。現代美術は難解で敬遠されがちであるが、視点の広がりをもたらすことのできる美術として公開制作やワークショップに適したジャンルであると感じた。反対に鑑賞者に浸透しやすい形で作品や作家が近づくことで、現代美術の苦手意識を払拭するアプローチの手段ともなり得ると思われた。

また、井川氏の作品は日常空間の利用、自然との調和、明るい色彩といった共感を得やすい特性を持ち合わせており、様々なコミュニケーションの場をもたらした。それは、公開制作が美術という枠にとどまらず、参加者・鑑賞者が美術を取り巻く社会を見つめる機会となり得ることを実感した。

あくまでも今回の公開制作は１つの事例に過ぎない。当館の公開制作は単独の事業として位置づけられているが、展覧会事業に付随した関連事業として公開制作を企画する方法も考えられ、その場合、これまでと違った公開制作の方法が模索できるであろう。鑑賞者、作品、作家、しいては社会と美術を結ぶ場として効果的な公開制作として、今後その都度目的や方法を検討しながら実施していきたい。井川氏の地域性を絵画に取り入れながら制作姿勢に学び、当館の公開制作をはじめとした事業も地域性をうまく活用していくことで、美術館のオリジナリティーを創出していくべきではないかと考えた。

註

(1) 当館では平成11年に新館がオープンした際、南館に県民アトリエを設置した。そこでは、スペースはもちろん設置してある機材・道具を無料で貸し出しし、誰もが自由に創作活動が行えるシステムで一般の方に利用いただいている。

(2) 井川惺亮「絵画的空間の一考察：市場（いちば）のギャラリーと三角柱をテーマにした絵画的作品について」『長崎大学教育学部人文科学研究報告　第56号』（1997年３月・長崎大学教育学部）より引用する。

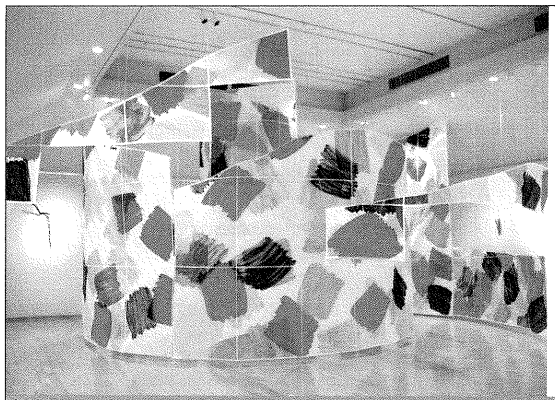
(3)『新建築』（1999年２月・新建築社）に愛媛県美術館が紹介され、そこに寄稿してあった日建設計・大谷弘明氏の設計コンセプトについての文章を、井川氏に展示の参考資料として提供した。

(4)「身色九色鹿住山出河邊助人語第十八」『今昔物語集　巻第五』に、釈迦が身の色は九色、角の色は白き鹿として登場する。

(5) 本公開制作は、長崎大学教育学部に後援いただき、実施した。

(6) 愛媛県東予市国安・石田地区で生産される周桑和紙は、天保年間、土佐から技術を導入し農業の副業として広まった。現在、手漉き和紙では奉書紙、檀紙において全国生産の約９割を占める。ワークショップでは楮を原料とした画仙紙を使用した。

資料1　チラシ



作品展示

2005/1/8(土)～30(日)
9:40～18:00

月曜日休館
(ただし1月10日は開館、翌11日は休館)

※1/5(水)より作家が来館し設営を行います。

入場無料

井川惺亮

Seiryo Igawa

色の広がり

公開制作

愛媛県美術館

ワークショップ

色の広がりと空間を楽しもう!

2005/1/8(土)～10(月)

井川先生と一緒に和紙を折ったものに色を塗って作品を作ってみませんか。

また、そこで制作した作品は、井川先生の作品と一緒にエントランスホールで展示し、鑑賞会を開きます。みなさんの参加をお待ちしています。

詳しくは裏面をご覧ください。

幼い頃、瀬戸内海の島で過ごした井川惺亮氏。その記憶に留められている、石灰岩の島、大山祇神社の国宝の鎧や刀などに付いている装飾品、薄暗がりの中に竹林や紅葉や赤松が射影された障子など、島での光景は、明るい温かみのある井川氏の作品の色彩を想起させます。

井川氏はフランス留学以降、絵画の画布や木枠の属性を解体して現実空間へと解放し、赤・青・黄の3原色を中心とした9つの既成の色で、窓ガラスを拭くときのようなタッチでシステマティックに着彩する手法により、一貫して「Peinture絵画」と題し制作してきました。そして、作品を配置する場所性、作家と作品と鑑賞者の関係性の問題を意識し、絵画をより身近なものとするため、日常の中から表現できる絵画の素材を求め、絵画の可能性の拡張に挑み続けます。

本公開制作では井川氏の制作のテーマでもある絵画の広がりと空間の演出、そして自然が持つ風物(色など)との調和を作品展示、ワークショップにより体感していただきたいと思います。その作品展示では、愛媛県美術館を取り巻く風景や建物との調和を試み、井川氏特有の手法により着彩された和紙の作品で、新たな生きた作品空間を生成します。また、ワークショップでは、愛媛県産の手漉き和紙を素材に、折り紙制作から展示にいたるまでの過程を追体験することで、作家の制作姿勢に触れ、アート(美術)のあり方を作家とともに再考する機会となります。あなたもアーティストになれる今回の公開制作に、多数のご参加をお待ちしています。

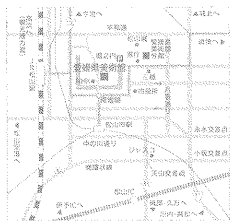
参加者募集

ワークショップ「色の広がりと空間を楽しもう!」

日時	対象及び定員	内容	材料費
1月8日(土) 10:00～15:30 (休憩12:00～13:30)	中学生以上 50名 要申込	作家がスライドを使って自作について語り、その後、作家とともに和紙を折ったものに着彩し、作品を制作します。	150円
1月9日(日) Ⓐ10:00～12:00 Ⓑ13:30～15:30	小学生 各20名 要申込	作家とともに和紙を折ったものに着彩し、作品を制作します。	150円
1月10日(月) 10:00～12:00	8日、9日の参加者	エントランスホールで8日、9日に制作した作品を作家とともに展示し、鑑賞します。	――
1月10日(月) 13:30～14:30	一般	エントランスホールで作家による作品鑑賞会を行います。どなたでもご参加いただけます。	――

申し込み方法　往復はがきに参加希望日(9日はⒶⒷいずれかを選択)、郵便番号、住所、氏名(フリガナ)、年齢、電話番号を記入し、お申し込みください。なお、応募者多数の場合は抽選となります。　締め切り/2004年12月21日(火)必着

お問い合わせ&申込先　〒790-0007　松山市堀之内　愛媛県美術館　普及係
TEL 089-932-0010　FAX 089-932-0511



[交通案内]
①JR松山駅前より路面電車「大街道」または「市駅前」行き市内電車で5分、「堀端」(愛媛県美術館)下車、徒歩1分。
②松山観光港より リムジンバスで30分、「市駅」下車、徒歩5分。
③松山空港より車で20分。
駐車場は、隣接する県庁の駐車場を利用することができますが、駐車台数に限りがありますので、できるだけ公共交通機関のご利用をお願いします。

愛媛県美術館
〒790-0007　愛媛県松山市堀之内
TEL089-932-0010　FAX089-932-0511
http://joho.ehime-iinet.or.jp/art/

井川惺亮略歴

1944年生まれ。
1963　愛媛県立今治西高等学校卒業。
1968　東京藝術大学油画科卒業。
1970　東京藝術大学大学院修了。
1975　フランス政府給費留学生として渡仏。
1976　ARC2(パリ市立近代美術館)でグループ展開催。以降、各年各箇所にてグループ展開催。
1978　マルセイユ・リュミニ芸術建築学校卒業。
　　在マルセイユ総領事館で個展開催。以降、各年各箇所にて個展開催。
1984　長崎大学助教授(1989　同大学教授)就任。
1992　文部省在外研究員としてベルビニャン美術学校及びパリ美術学校に研修。

プロジェクト　1988年 カラーメッセージ(絵画)／五島コンカナ王国(長崎)をはじめ、横浜美術館、川崎市民ミュージアム、ハラミュージアムアーク等で開催。1995年より講師を務める長崎大学公開講座においては、1998年に始まった「地域に根ざした美術」シリーズとあわせ、小浜町でのワークショップを毎年開催。

資料２

タイトル：井川惺亮公開制作（仮称）

色の広がりと空間を楽しもう！（サブタイトル仮称）

概要

A、コンセプト：

1、誰でもアーティスト！（本来、自然を見て感動していた。そのような感動を美術体験する）
2、誰でもが親しめる新たな美術を楽しもう！（現代美術への理解）
3、もう一つの美術の発表の場（ものを配置・置く場合、その場所性を、今一度考えよう）
4、日本人の美的感性の再発見しよう！（今回は、地元の和紙を使用しての美の表現のあり方と日本人の持っている仕草・身体性を探ってみよう）
5、絵画の色の広がりとその空間の演出、それと一方で自然が持つ風物（色など）との調和、あるいは一体感を表現・鑑賞する。

B、内容：

1、　井川（現代美術家）がエントランスホールという空間を使用して作品を設営（インスタレーション）する。
その意義：
①何気ないエントランス空間（通常作品展示として使用されてない）を、井川作品によって、外側の風景と内側の建築空間との調和を図る。
このことは、普段意識されない内側空間と外側空間とを再認識することになり、特に建築（美術館）がいかに外部と関わりよって成り立っているかの一助にもなる。Ａ３
②現代美術のあり方の理解への道ともなる。Ａ２
③アーティストが展示（インスタレーション）風景を公開する。

2、　子どもと一緒になって、及び一般市民との公開制作（ワークショップ）では、地元物産の和紙を用いて、制作する。
その意義：
①Aコンセプトの全てに当てはまる。
②特に子どもたちが、手作業を通して美的体験をする機会がなくなりつつあるので、和紙のよさや折り紙による制作で日本人の感性を促すことになる。
③義務教育における「図画工作」や「美術」の重要さを示すことになる。
④参加型ワークショップ、体感できる美術でもある。

3、その成果を展示しよう、そして鑑賞をしよう。
その意義：
①皆で展示することによって、コミュニケーションを図ることになる。
②美術教育の重要課題として、「鑑賞」の教育に幅を持たせ、美の秩序を知り、ひいては自信をつけさせることになる。
③参加型ワークショップ、体感できる美術でもある。

資料３－1

ワークショップ－中学生以上対象プログラム【１日目】－
タイムスケジュール

日時：２００５（平成１７）年１月８日（土）１０：００～１２：００、１３：３０～１５：３０
対象：中学生以上５０名
場所：愛媛県美術館　講堂及びアトリエ２（20名）・実技教室（30名）
講師：井川惺亮（長崎大学教授）

【午前の部】

時間	内　容	長大スタッフ
9:00 ｜ 9:40	集合・準備	会場設営…（緒方・小池・松尾）を中心に全員で行う スライド、ビデオセット等準備、操作（藤崎） **（機器は美術館側が用意）** 撮影…ＤＣ（田熊）　ＤＶ（守屋）　一眼レフ（川田） ＊最初から最後まで撮影をする ＊一箇所に固定せず、背景・主役・臨場感を考えて撮影。
9:40 ｜ 10:00	受　付（美術館対応） ＊受講者に**名札**を渡す	○班を説明 ⅠAB6　ⅠCD7　ⅠEF7　ⅡAB10　ⅡCD10　ⅡEF10 緒方　小池　福田　松尾　山中　前田 ＊ⅠAB６の説明 Ⅰ…場所（Ⅰ…アトリエ２、Ⅱ…実技教室） AB…班別 （Ａ赤・Ｂ水色・Ｃピンク・Ｄ茶色・Ｅ緑・Ｆ黄色） ６…受講者数
10:00 ｜ 10:05	講師紹介	美術館側から
10:05 ｜ 11:00	レクチャー開始 講師の活動について語る	〈使用するもの〉 **スライド・液晶プロジェクター、ビデオデッキ、ＣＤ** **アンプ・マイク**　機器の操作（藤崎）
11:00 ｜ 11:10	休　憩	ＶＴＲの準備
11:10 ｜ 11:50	中国黒龍省美術館個展 上映（ＶＴＲ）	機器の操作（藤崎）
11:50 ｜ 12:00	感想文 午後のワークショップの説明	**感想文用紙**（Ａ５）、**鉛筆**を配布（緒方・前田）
12:00 ｜ 13:20	昼食・休憩	長大スタッフは昼食後、午後のワークショップの会場設営・準備

資料３－２

【午後の部】

時 間	内　　容	長大スタッフ
13:20 ｜ 13:30	右の　ＩＡＢ6の説明 Ｉ…アトリエ２ Ⅱ…実技教室 ＡＢ…班別 ６…受講者数	参加者誘導 （アトリエ２）　ＩＡＢ６　ＩＣＤ８　ＩＥＦ６ 緒方　小池　福田 （実技教室）　ⅡＡＢ10　ⅡＣＤ10　ⅡＥＦ10 松尾　山中　前田 ＤＶ（Ｉ守屋、Ⅱ藤崎）　ＤＣ（Ｉ浦川、Ⅱ田熊） 一眼レフ（川田）
13:30 ｜ 13:40	ワークショップ開始	オリエンテーション（井川） ○趣旨・目的　○方法・やり方の説明　○注意点 実技室Ⅰ・Ⅱに分かれる…班長が誘導する
13:40 ｜ 13:50	和紙を折る 受講者２枚制作	和紙のサイズ：45㎝×45㎝
13:50 ｜ 14:50	着彩（６色）*詳細は別紙参照 赤、紫、青、緑、黄、橙	10分毎に絵の具を回す（サイクルする）
14:50 ｜ 15:15	展示 批評会 （2枚のうち1枚を展示）	会場の壁面に作品を取り付ける（乾かしてから展示すること） ＊10日展示用の作品を集める際に、批評会用と鑑賞会用とに分ける。**（名前、日付、班の記入を確認）** 班長は**セロテープ**を用意：アトリエ2…20人×3＝60個 （テープは三箇所つける）　実技教室…30人×3＝90個
15:15 ｜ 15:20	後片付け	
15:20 ｜ 15:30	感想文	各班の班長は**感想文用紙（Ａ５）、鉛筆**を配布 10日の説明
15:30	終了	展示した作品は持ち帰る

資料４

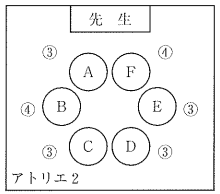
ワークショップ―中学生以上対象プログラム―実施方法

○１月８日（土）時間：13:30～15:30
対象：中学生以上50名
場所：アトリエ２（20名）実技教室（30名）

役割分担と受講者の配置について

1．グループはA赤・B水色・Cピンク・D茶色・E緑・F黄色の６班に分けます。配置は〈図１〉、〈図２〉の通りです。
2．班長（チームスタッフ長大生）のアトリエ２と実技教室の割り振りは〈表１〉、〈表２〉の通りです。

〈グループの配置〉

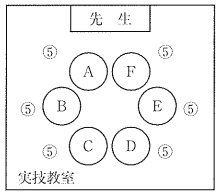


〈図Ⅰ〉*数字は人数

Ⅰ―ＡＢ	緒　方
Ⅰ―ＣＤ	小　池
Ⅰ―ＥＦ	福　田

〈表１〉

〈グループの配置〉



〈図Ⅱ〉*数字は人数

Ⅱ―ＡＢ	松　尾
Ⅱ―ＣＤ	山　中
Ⅱ―ＥＦ	前　田

〈表２〉

ワークショップ　制作について

1．受講者は２枚の和紙を折ります。（和紙のサイズ：45㎝×45㎝）
2．アクリル絵の具で、和紙に着彩します。
（赤、紫、橙、青、緑、黄）の順に着彩し、10分毎に次の班に絵の具を回します。
こうすると、Ａ～Ｆまで６色すべて行き渡ります。
＊この時、次の着彩まである程度乾かします。
3．すべて塗り終わったら、ドライヤーを使って絵の具を乾かします。

批評会について

1．先生の指示に従い、作品をそれぞれの会場に簡単に展示し、アトリエ２→実技教室にしながら批評会をします。
＊展示の時、セロテープは２箇所つけます。
2．２枚の作品のうち、１枚をワークショップ当日展示し、終了後各自持ち帰ります。
もう１枚は10日の鑑賞会用として提出します。
＊作品の裏には、名前、日付、アトリエ２、実技教室、班を記入します。

感想文について

1．配られた用紙（Ａ５）にワークショップ、批評会の感想を書きます。
＊用紙（Ａ５）には名前、年齢等の記入をお願いします。
2．感想文を書いたら、用紙を班ごとにチームスタッフが集めます。

資料５

ワークショップ－小学生対象プログラム【２日目】－
タイムスケジュール

日時：２００５（平成１７）年１月９日（日）Ⓐ10:00～12:00、Ⓑ13:30～15:30
対象：小学生　ⒶⒷ各２０名
場所：愛媛県美術館　アトリエ２
講師：井川　惺亮（長崎大学教授）

時間Ⓐ	時間Ⓑ	内　　容	長大スタッフ
9:00 ｜ 9:40		集合・準備	●会場設営（緒方･小池･松尾）を中心に全員で確認 撮影…DC（田熊）・DV（藤崎）・一眼レフ（川田） ＊最初から最後まで撮影をする。 ＊一定の場所でなく、背景･主役･臨場感などを考えて撮影する。
9:40 ｜ 10:00	13:00 ｜ 13:30	受　付（美術館対応、６班別に） ＊受講者に**名札**を渡す 右の　Ａ４の説明 Ａは班別、４は受講者数	参加者を班別に誘導 Ａ３　緒方　Ｂ３　小池　Ｃ４　福田　Ｄ４　松尾　Ｅ３　山中　Ｆ３　前田
10:00 ｜ 10:10	13:30 ｜ 13:40	Ⓐワークショップ開始 受講者２枚制作	オリエンテーション（井川先生） ○趣旨･目的　○方法･やり方の説明　○注意点
10:10 ｜ 10:20	13:40 ｜ 13:50	和紙を折る	**和紙のサイズ：45㎝×45㎝**
10:20 ｜ 11:20	13:50 ｜ 14:50	着彩（６色）*詳細は別紙参照	１０分毎に絵の具を回す（サイクルする）
11:20 ｜ 11:45	14:50 ｜ 15:15	展示 批評会 （２枚のうち１枚を展示）	会場の壁面に作品を取り付ける(乾かしてから展示すること) *作品を集める際に批評会用と鑑賞会用とに分ける。 **（名前、Ⓐ日付、班の記入を確認）** 展示班(福田･山中)は、額と**セロテープ**を用意：20×3＝60(個)
11:45 ｜ 11:50	15:15 ｜ 15:20	後片付け	
11:50 ｜ 12:00	15:20 ｜ 15:30	感想文	**感想文用紙(Ａ５）鉛筆**　　10日の説明
12:00	15:30	終　了	

資料６

ワークショップ－小学生対象プログラム－実施方法

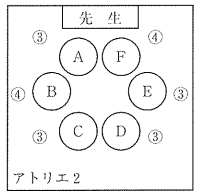
○１月９日(日)　時間:Ⓐ午前10:00～12:00　Ⓑ午後13:30～15:30
対象：小学生以下　各２０名
場所：アトリエ２

役割分担と受講者の配置について

１．グループはＡ赤・Ｂ水色・Ｃピンク・Ｄ茶色・Ｅ緑・Ｆ黄色の６班に分けます。配置は〈図１〉、〈図２〉の通りです。

２．班長（チームスタッフ長大生）の割り振りは〈表３〉の通りです。

〈グループの配置〉



〈図３〉*数字は人数

班	チームスタッフ
A	緒方
B	小池
C	福田
D	松尾
E	山中
F	前田

〈表３〉

ワークショップ　制作について

１．受講者は２枚の和紙を折ります。

２．アクリル絵の具で、和紙に着彩します。
（赤、紫、橙、青、緑、黄）の順に着彩し、１０分毎に次の班に絵の具を回します。
こうすると、Ａ～Ｆまで６色すべて行き渡ります。
＊この時、次の着彩までである程度乾かします。

３．すべて塗り終わったら、ドライヤーを使って絵の具を乾かします。

批評会について

１．先生の指示に従い、作品を簡単に展示し、批評会をします。
＊展示の時、セロテープは３箇所つけます。

２．２枚の作品のうち、１枚をワークショップ当日展示し、終了後各自持ち帰ります。
もう１枚は１０日の鑑賞会用として提出します。
＊作品の裏には、名前、日付（Ⓐ午前･Ⓑ午後）、班を記入します。

感想文について

１．配られた用紙（Ａ５）にワークショップ、批評会の感想を書いてください。
＊用紙(Ａ５)には名前、年齢等の記入をお願いします。

２．感想文を書いたら、用紙を班ごとにチームスタッフが集めます。

資料７

ワークショップ－中学生以上・小学生対象プログラム【２日目】－
タイムスケジュール

日時：２００５（平成１７）年1月１０日（月）　１０：００～１２：００
対象：ワークショップ受講者
場所：愛媛県美術館　エントランスホール
講師：井川惺亮（長崎大学教授）

	時　間	内　　容	長大スタッフ
午前の部	9:00 ｜ 9:40	展示の打ち合わせ	撮影…DC（田熊）・DV（藤崎）・一眼レフ（川田） ＊ 最初から最後まで撮影をする ＊ 一定の場所でなく、背景・主役・臨場感など考えて撮影する。
	9:40 ｜ 10:00	受　付（美術館対応）	参加者に展示場所の札を渡す（日付・班・人数…班長：場所・セロテープの数） 8-Ⅰ-ＡＢＣＤＥＦ（20人）…（松尾・前田）：エントランス入口　㊽ 8-Ⅱ-ＡＢＣＤ（20人）…（緒方・山中）：エントランス中庭　㊽ 8-Ⅱ-ＥＦ（10人）…（福田）：２Ｆ中庭　㊵ 9-Ⓐ午前-ＡＢＣＤＥＦ（20人）…（浦川）：２Ｆ休憩場　㊽ 9-Ⓑ午後-ＡＢＣＤＥＦ（20人）…（小池）：２Ｆ休憩場　㊽
	10:00 ｜ 10:10	展示の説明 掲示板（展示場所指定）	オリエンテーション（井川先生）　集合：班別に並ぶ ○趣旨・目的　○方法・やり方の説明　○注意点
	10:10 ｜ 10:40	作品展示	あらかじめ、指定していた展示場へ誘導し、展示作業を行う。 班長は展示道具を準備（**セロテープ**）：90×4＝360個
	10:40 ｜ 11:40	鑑賞会開始	みんなで鑑賞をする １．展示全体について　２．各班の場所へ移動しながら鑑賞 （１→４カ所）
	11:40 ｜ 11:55	感想文	各班長は**感想文用紙**、鉛筆を配布
	11:55 ｜ 12:00	終わりの挨拶	美術館側から
	12:00 ｜ 13:00	昼食・休憩	長大スタッフは昼食を取った後、午後の鑑賞会の準備に取りかかる

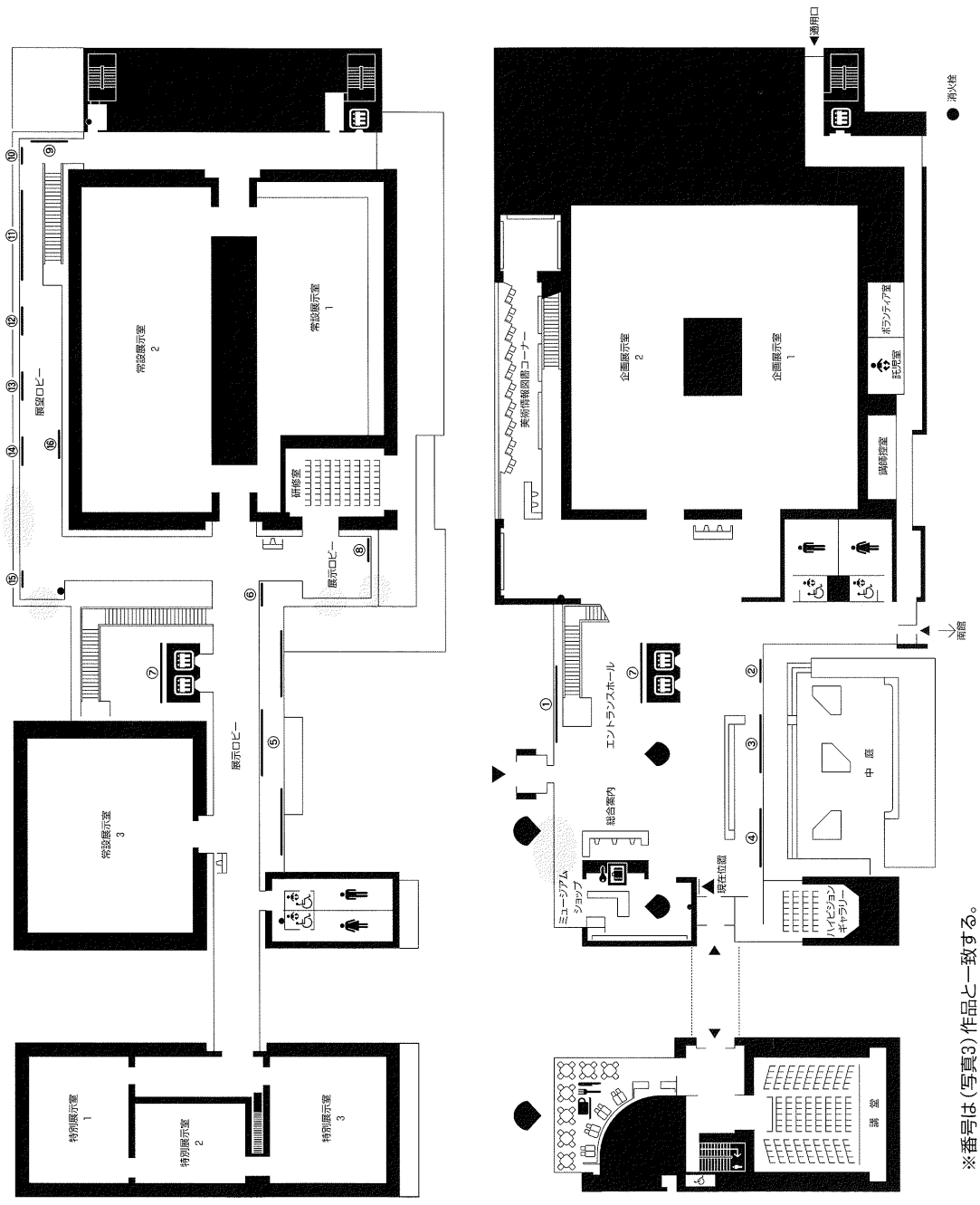
資料８

ワークショップ－一般対象プログラム－
タイムスケジュール

日時：２００５（平成１７）年1月１０日（月）１３：３０～１４：３０
対象：一般
場所：愛媛県美術館　エントランスホール
講師：井川惺亮（長崎大学教授）

	時　間	内　　容	長大スタッフ
午後の部	13:10 ｜ 13:30	受　付（美術館対応）	○撮影は午前と同じ 待機場所指定（エントランス 中庭）
	13:30 ｜ 14:20	鑑賞会開始	各班の展示場所へ移動（４カ所）１→４ ワークショップ制作、展示作品解説
	14:20 ｜ 14:30	感想文	**感想文用紙**、**鉛筆**を配布（緒方・前田） （氏名・年齢等を記入）
	14:30 ｜ 15:00	終　了	美術館側から 後片付け
	15:00	反省会・打ち上げ	（スタッフ側など）

資料９　展示図面



①～⑯…井川愷亮作品　※番号は（写真３）作品と一致する。
…ワークショップ参加者作品

資料10　ワークショップ参加者感想文抜粋

○中学生以上対象プログラム

【１日目】－午前・講義

・今、在るがままの自分、環境を受け止めるという、とても柔軟で自由、何にも捉らわれないが、他人に左右されない不動の自己をもった精神というものを感じ、とても先生の生き方自体に学ぶものが大きかったと思います。(43歳・女性)

・常識の枠を越えた展示空間に心が開放された。また、我々が忘れかけている多くの素材の発見と美について新たに考えさせられた。(女性)

・スケールの大きさと心地よさに驚きました。専門の人の考え方は素晴らしいと思いました。(13歳・男性)

・空間へのインスタレーションは、僕らにとってはまだまだ未知の領域ですが、素材に対する考え方や、空間演出、色彩感覚など共感できる部分が多くありました。(25歳・男性)

・光を通した透明の美しさはステンドグラスと似たところがある。しかし、ガラスは空気を遮断するが、それに対し井川先生の作品は空気の中でたゆたっている。(55歳・女性)

・現代アートとなると縁遠いもののように考えていたが、考えるよりも感じたことを素直に表現していけば、それが自分にとってのアートになるのではないかと感じ取りながら、美術は楽しむものなのだと改めて思いました。(21歳・男性)

・井川先生の人生や面白い話を聞かせていただき、とても楽しく過ごすことができました。公開制作に参加するのは初めてですが、午後からの授業も楽しみたいと思います。(13歳・男性)

・館内に入ると何時もの、井川先生の作品の彩りが冴えていて、高さもあり美しい世界が広がっていて、感動いたしました。(63歳・女性)

・現代美術の良いところは、全身で飛び込んでゆけるところだと、画像から感じ取れました。とても自由で決まりがないところにも魅力を感じました。今回のこのような活動を通して、どんな所にも芸術が隠されているのだなと思いました。もっと洞察力を持って、気付かないような小さなことにも感動できる心をもちたいと思いました。(17歳・女性)

・井川先生の作品は色彩の美しさはもちろんですが、それぞれの色の持つ力強さを感じ、それらを配置することと、余白の美しさですがすがしさも感じました。エントランスホールで展示では、普段見慣れているはずのエントランスが全然違う空間のように思えました。本当に色の広がりを感じ、空間を感じました。(42歳・女性)

・この美術館に入った瞬間、先生の作品がすぐ目に入りました。何か色達が自由に遊んでいるようでおもしろかったです。(17歳・男性)

【１日目】－午後・実技

・普段、原色そのままを用いて制作することがなかったので、新鮮でした。また、折りを広げたときの驚きは色の広がりを感じ、光がさしたような感覚でした。(25歳・男性)

・最初、和紙を折っている時は、どんなふうにできるかとても楽しみでした。色をつけている時も楽しく塗ることが出来たので、良かったです。また、開いてみたら自分が思っていたものと違ったものが出来不思議でした。(14歳・男性)

・折る・色をつけるという作業がとても楽しかったですが、上手く作ろうという邪心が入ってしまったのが悲しい。しかし、やっているうちに、兎に角、「作る」ということを楽しむようになれたかなと思います。(43歳・女性)

・無心で色をおいていた。感覚だけで色を塗る楽しさは、ずっとやっていたかった感じです。そして、開いたときの驚き！！ とても新しい芸術の感じを教えてもらえた気分です。(38歳・女性)

・いつもは、自分で作品の色やどう塗るかを考えて作っていましたが、偶然出来る色はいつもより新鮮であったように思いました。美術という空間がもっと広がっていくんだと思いました。(17歳・男性)

・折ることの快さを久し振りに感じました。色を

置く楽しさ、面白さ、広げるときのときめき、驚き、…なんと楽しい作業ではないか。色の持つ、魅力に取り付かれそうです。（55歳・女性）

・色をつけて立体から平面に解体、変化していくときのドキドキがとてもおもしろかった。一人一人違うので、他の人の作品を見るのもとても楽しかった。色を意識すること、無意識にできあがる色のかたちが楽しめた。（20歳・女性）

・これだけ人によって印象が全然変わるのはおもしろいなと思いました。単純に色をつけるということだけなのに、その人の人柄も出ているようで楽しかったです。（28歳・女性）

・今まで何かものしか描いたことがなかったんですが、こういう自分の頭の中に思い浮かぶものを折って色を塗るということが初めてでとても楽しかったです。（13歳・男性）

○小学生対象プログラム

【１日目】－Ａ

・作るのが段々楽しくなってきたので、良かった。また、思ったより上手く出来たと思い、とても良い思い出になりました。（９歳）

・紙を折って、色を塗ると、（折った紙を開くと）白い面ができて面白かったです。白い面が大きくて、少しつまらない作品になったけど、図工が好きになりました。（９歳）

・お絵かき教室に通っているけど、こんな絵は始めて描きました。（８歳）

・色を塗る時は、自分の作品が派手だな、複雑だななどとやることに自身がありませんでした。でも広げたときには、心が変わっていました。あまりにもスッキリ綺麗になっていたからです。（10歳）

【１日目】－Ｂ

・学校でもできないことが出来るので、これからもこんな講座が出来たらいい。（11歳）

・学校では出来ないことが出来てよかったです。広げてみるとスゴイ形ができてました。（10歳）

・今日は、色を塗るのが楽しかったです。広げてみると、すごく綺麗になっていました。みんなの絵を見ても綺麗でした。（９歳）

・和紙に色を塗るとどんどん染みていきました。和紙に絵を描くのは初めてだったので、染みるのをみるのがとても楽しかったです。（８歳）

○中学生以上＋小学生対象プログラム

【２日目】

・作品を貼る作業自体が楽しかったです。貼り終えて一つの大きな作品になっているのを見たときは感動でした。ガラスに貼られているので外の風景と一体になっているし、先生の作品の仲間みたいで嬉しい気持ちで一杯でした。（57歳・女性）

・建物がガラス面が多いということで、光を通して色の表情も変化するし、ガラスが鏡のような効果も発揮して、意外なものを見ることができました。木漏れ日で色が踊るようにも見えるなど、この美術館の面白さを新発見しました。（42歳・女性）

・陽の光が先生の作品に当たると黄色が輝き始めて、あたりが暖かい光でいっぱいになるようで、外は寒いけれど、中は一足早く春がきているようで幸せです。（57歳・女性）

・みんなの作品は、一つ一つ違うけれど、みんなの作品が一つの絵の様になっていたので、ビックリしました。外から見ると、また変わっていたので、ビックリしました。（9歳・女性）

・先生の作品が、外の世界と反映しあって、どんどん広がりを変容するということに驚き、新しく知った美術の空間を楽しみました。（55歳・女性）

・自分の作品をガラスに貼って、色が広がったように光って綺麗でした。外から見た感じと中から見た感じが全く違って見えました。先生の作品も色んな色がいっぱい使ってあって、お城を入れた作品がとても綺麗に見えました。（11歳・女性）

・小学生の作品の中に、クワガタムシ・イチゴを描いているものがあり、好きなものを描くとい

う意志を感じ、嬉しく思った。それから、みんなの絵が集まり、エネルギーが増していると強く感じた。(55歳・男性)

・作品を作ったときと、貼ったときとを比べて見る事が出来た。一つよりも沢山貼っているほうが、楽しさが倍増していることがわかった。(11歳・男性)

・展示の面白さや難しさを体験できました。前もって相談した訳でもないのに、玄関付近は少し改まったよそ行きの雰囲気があり、2階は和やかで親しみのあるイメージでくつろげます。(42歳・女性)

・楽しい二日間をありがとうございました。生活することを楽しむという一歩が踏み出せそうに思います。(55歳・女性)

・展覧会場を出て、ホッとして楠に見入るのだが、光がさした井川先生の絵はまた一つの自然であると感動しました。(55歳・男性)

○一般対象プログラム

・いつもと違う絵画を見て、「はっ」としました。後ろの風景と絵画を合わせるというのは、今まで気付きませんでした。美術の世界が広がったような気がします。(13歳・男性)

・作品が平面でなく、立体に見えた。空気や空間を作っていると思う。あらゆる角度から見ることが出来る作品で面白かった。(20歳・女性)

・瀬戸の小大下島の原点が鮮やかな色で表現されるとは嬉しい限りです。美術館が良く生かされ、楠の立派さが改めて感じられます。(69歳・女性)

・外交をも積極的に取り入れて、自然と一体になれる作品に会えて、自分も作品に参加しているような不思議な気持ちになりました。(60歳・女性)

・周りの風景や日のあたり方によって、色が変わって見えるのが不思議でした。(14歳・男性)

写真１　公開展示作業

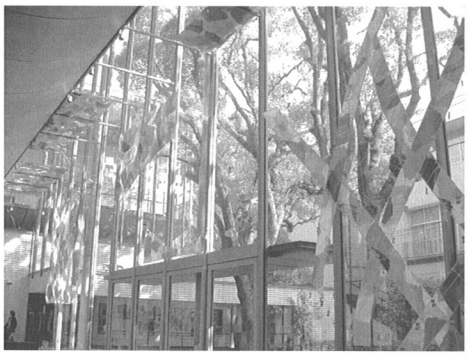
①

②

③

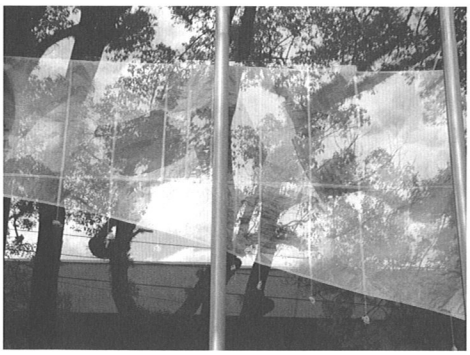
④

写真２　作品展示

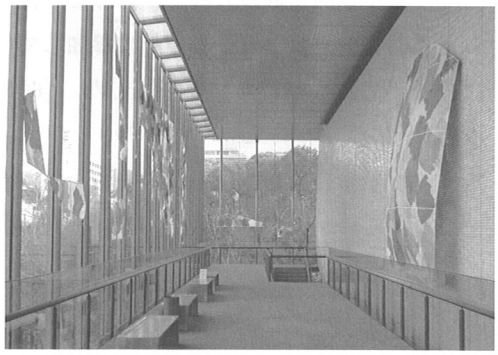


①エントランスホール

②中庭のクスノキの間より撮影

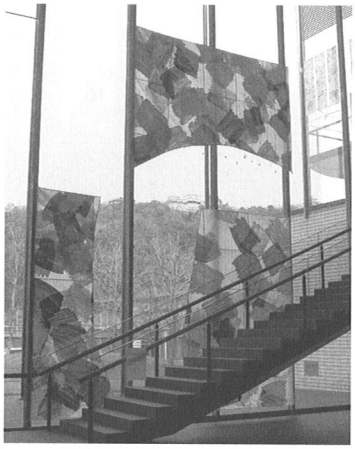


③ガラス越しに、中庭から撮影

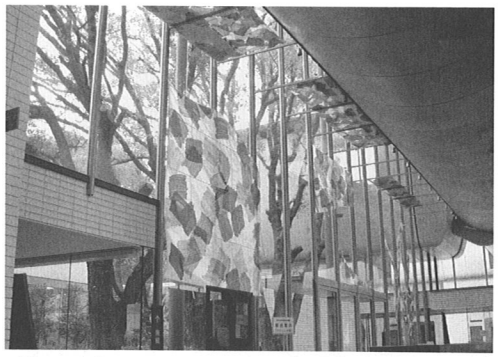


④展望ロビー

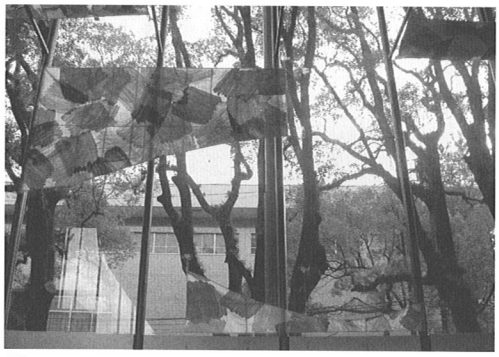
写真３　作　品



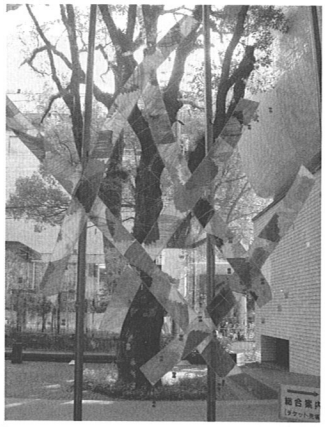
①エントランスホール・正面玄関横



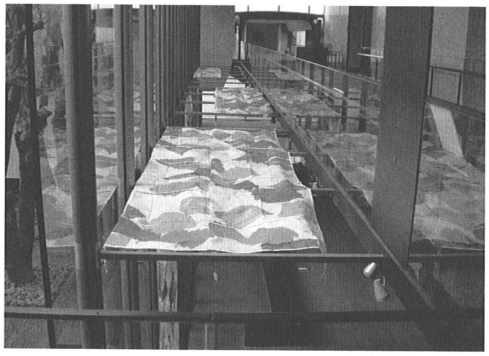
②エントランスホール・中庭側



③エントランスホール・中庭側

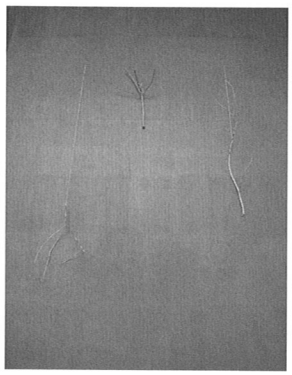


④エントランスホール・中庭側



⑤エントランスホール・１－２階吹き抜け

⑥エントランスホール・企画展示室前

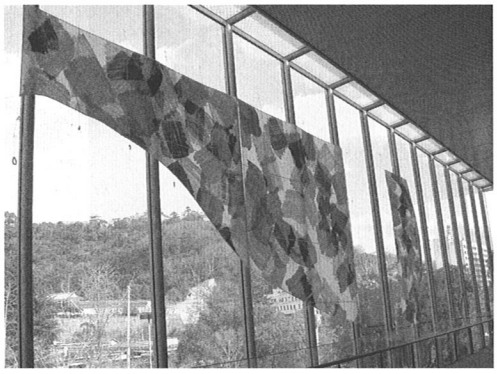


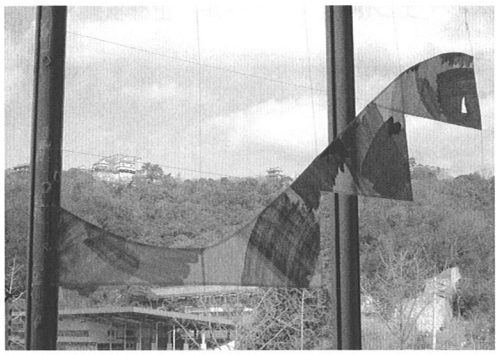
⑦エントランスホール・エレベーター壁面

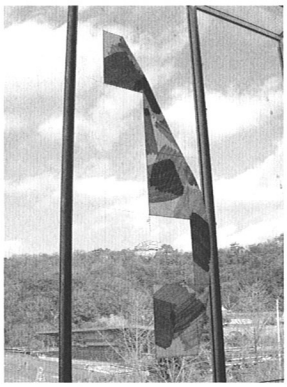
⑧研修室前

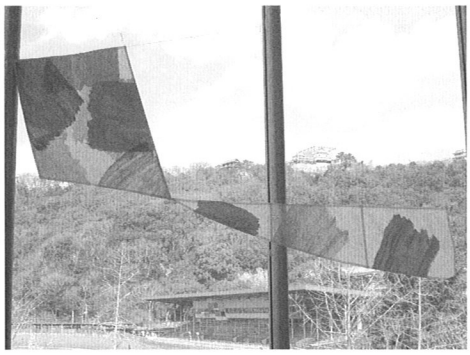
⑨展望ロビー

⑩展望ロビー


⑪展望ロビー


⑫展望ロビー


⑬展望ロビー


⑭展望ロビー

⑮展望ロビー

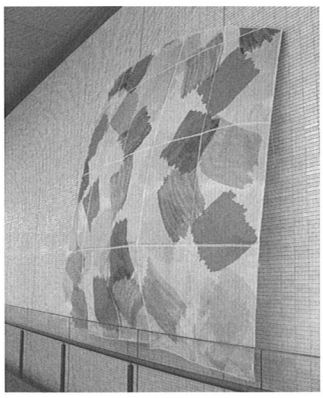
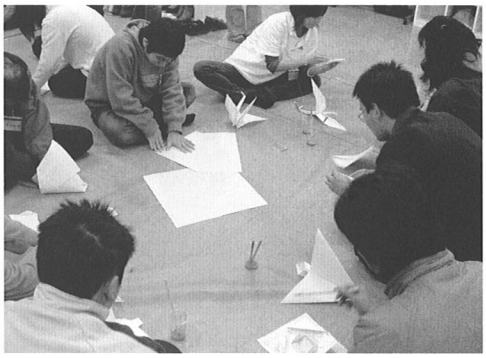

⑯展望ロビー

写真４　ワークショップ（中学生以上・１日目）

①講堂にてレクチャー



②制作

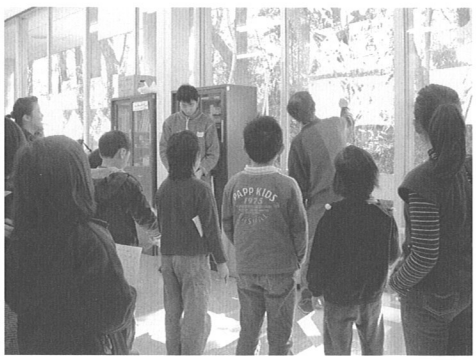
③制作

④作品鑑賞

写真５　ワークショップ（小学生・１日目）

①Ａ　制作

②Ａ　制作



③Ａ　鑑賞

④Ｂ　制作

⑤B　制作

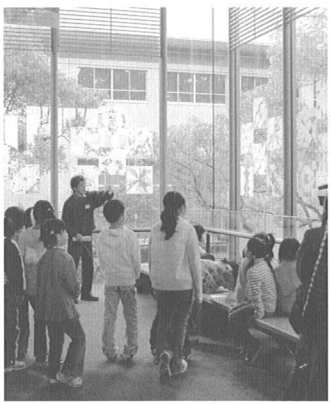
⑥B　鑑賞

写真６　ワークショップ
（小学生十中学生以上・２日目）

①

②

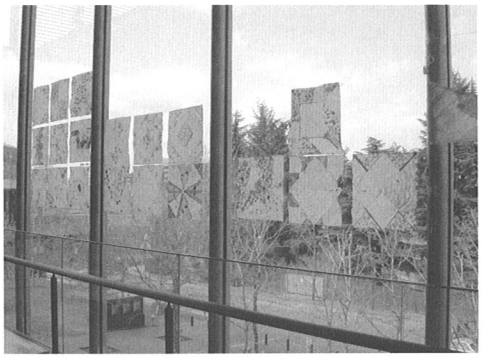
③



④

⑤

⑥

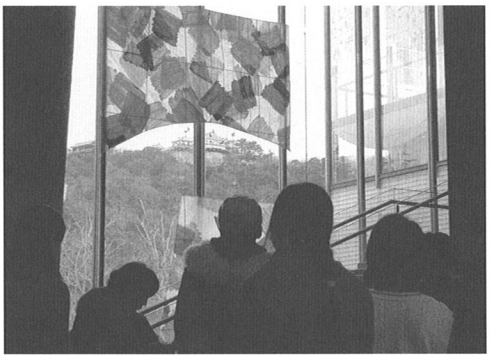


⑦参加者作品

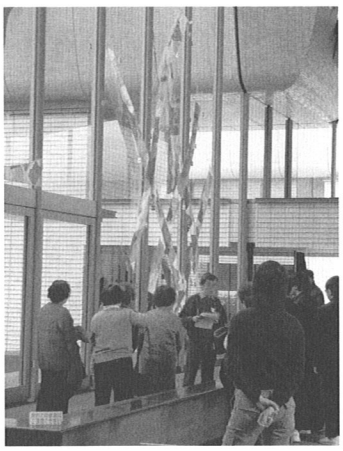
⑧参加者作品

⑨参加者作品

写真７　ワークショップ（一般）



①



②

③